

英語差別用語の基礎的研究(2) —人種差別用語 *Jap(s)* を中心に—A Basic Study of Discrimination Words in English (2) : With Special Reference to *Jap(s)*

苅部 恒徳*

目 次

- 1 人種差別語 (Discrimination Words) とは何か (はしがきに代えて)
- 2-1 人種差別に用いられる英語 (蔑視語・侮辱語・憎悪語・不快語等)
- 2-2 オックスフォード英語大辞典 (OED²) に見られる *Jap(s)* の用例
- 3-1 真珠湾攻撃と日系アメリカ人強制収容
- 3-2 資料集 “American Japanese Internment” に見る強制収容所における *Jap(s)* の用例
- 3-3 真珠湾攻撃直後の新聞に見られる *Jap(s)* の用例
- 3-4 ヒロシマ原爆投下直後の新聞見出しに見られる *Jap(s)* の用例
- 3-5 戦時中の軍事ポスターに見られる *Jap(s)* の用例
- 3-6 戦時中の軍歌 (War Songs) に見られる *Jap(s)* の用例
- 3-7 戦時中のプロパガンダ映画 *The Battle of China* (1944) のナレーターの用いた *Jap(s)* の用例
- 3-8 John W. Dower, *War Without Mercy* (1986) に見られる *Jap(s)* の引用例
- 4 人種差別用語撤廃の困難な状況 (あとがきに代えて)
- 5 註
- 6 参考文献

1 人種差別語 (Discrimination Words) とは何か (はしがきに代えて)

本論は、筆者が本誌第4号(2001年3月)に発表した「英語差別用語の基礎的研究(1): 性差別用語」の続編である。今回取り上げた「英語人種差別用語」とは、特に米国における少数民族、例えば、アフリカ系アメリカ人、ユダヤ人、アラブ系アメリカ人、日系アメリカ人などの人種に対し侮辱・憎悪・排斥などの意図を持って、或いは意図せずともその効果を持つ文脈で用いられる蔑称 (slurs) を指すことにする。この蔑称は在住者を対象に繰り返し使用されることが多いが、場合によってはその人種の旅行者や一時的滞在者を対象に、さらに交戦国となった出身国(民)を対象に発せられ、書かれることもある。いずれにしても「英語人種差別用語」は差別表現一般の一部をなすもので、差別表現は言葉ばかりでなく、ポスター・漫画・歌・ジェスチャーなどから、物語・映画・演劇などによっても表現可能である。また人種差別的蔑称は特定の個人に対し発せられる場合でも、その背後には、その個人が帰属する人種全体に対する侮蔑や憎悪などの根深い感情と観念が存在している。自由主義国の憲法はすべて、米国憲法もその修正第1条で、「表現の自由」を謳っているが、差別表現の多くは憲法で保障された被差別者の人権と平等を否定し、被差別者に深い心の傷と社会生活上の不利益をもたらすものであり、「表現の自由」の名の下で弁護・免責されるべきものではないと思う。

2-1 人種差別に用いられる英語 (蔑視語・侮辱語・憎悪語・不快語等)

人種差別用語(英語では、ethnic slur「人種的蔑称」という言い方が一般的)とみなせる英語は非常に多い。筆者が目にしただけでもその用語集には、オンライン百科事典の Wikipedia の英語人種差別用語をアルファベット順に並べた ‘List of ethnic slurs’¹ や同じく Wikipedia の国民別にとまとめた ‘Offensive terms per nationality’²、さらには、主要な用語を解説した Menken の名著 *The American Language* の ‘Terms of Abuse’ の項などがある。これらの資料を参考に、ここでは米国で強い差別を受けた若干の民族を選んで例示するにとどめる。

まず、**アフリカ系アメリカ人 (African Americans) に対する差別用語**は *nigger*, *negro*, *colored* が代表的なものであり、すべてその肌の色に由来している。*black* にはちょっとした歴史があり、南北戦争後は *negro* とともに奴隷時代の連想が強いため彼らに拒否され、代わりに *colored* が受け入れられた。しかし20世紀前半には大文字の *Negro* が *colored* に代わって民族名称として好まれたが、1960年代の黒人運動 (Black Power Movement) とともに、人種的誇りを表す語として、彼ら自身がかつて拒否した *black* を復活させた。³

アフリカ系アメリカ人と同様、米国内で人種差別を受けた**ユダヤ人に対する差別用語**には、もっとも頻繁に使われる *Kike* [kaik] (前半の要素はスラブ系ユダヤ人名に多い -ki, -ky に由来する。後半の要素の説明を筆者

*KARIBE, Tsunenori [情報システム学科]

は見たことがないが、私見ではユダヤ人に多い名前の Isaac に由来する、やはり差別用語の *Ike* からか) をはじめとして、*Yid* [jid] (イディッシュ語で Jew の意)、*Jewboy* / *Jew Boy* (ユダヤ人男性に対する蔑称)、*Hymie* [háimi] (ユダヤ人に多い男子名 *Hyman* (原義は生命) から)、*Hebe*, *Heeb* [hi:b] (ヘブライ人 *Hebrew* [hí:bru] の略から) などが用いられている。日系人の蔑称の *Jap* とまったく同じ、ユダヤ人差別語 *Jap* があることに注意すべきである。この *Jap* は *Jewish American Princess* / *Prince* (金持ちのユダヤ人のドラ娘 / ドラ息子) の頭字語で、若いユダヤ人女性 / 男性に対する蔑称である。一般にユダヤ人を表すはずの *Jew(s)* も普通名詞としては(『ヴェニスの商人』の *Shylock* のような)「高利貸し、守銭奴」を、動詞としては「だまして儲ける」の用法が古くからあることから、差別語としての含意を持つため、今では一般にユダヤ人を指す用語としては *a Jewish person* / *Jewish persons or people* などが用いられる。とは言ってもこの婉曲用法が、かえって、ユダヤ人には蔑称の含意のある *Jew(s)* を避けていると思われて、不快感を与える場合があり微妙である。⁴

次に第2次世界大戦中、日本人と同様、米国の敵国民になったドイツ人とイタリア人に対する差別用語を見してみる。ドイツ人には第1次世界大戦中に用いられた *Hun* [hʌn] (破壊者、野蛮人の意味を持たせたフン族、匈奴。⁵ *OED*²によると、ドイツ皇帝 *Wilhelm II* が自国軍を鼓舞する演説に用いたことに由来するとのことだが、それが後に自国の蔑称となるとは皮肉である) の代わりに用いられた *Kraut* (ドイツ人が好物とするキャベツの酢漬けの *Sauerkraut* から)、*Jerry* / *Gerry* (*German* を英語のあだ名風に変形したもの)、*Fritz* (ドイツ人によくある名の *Friedrich* の愛称形から)、*Nazi* (ナチス)、*squarehead* / *boxhead* (でくの坊の意味) などがある。

イタリア人には *Dago* [déigou] (スペイン語の *Diego* (= (St) *James*, (San) *Diego*) からで、もともとはスペイン人を含むラテン系人に対する蔑称から)、*Wop* [wap] (多数のイタリア人が *without papers* (= *wop*) で移民登録を行ったことからとの説もあるが、伊達男を意味するナポリ方言の *Guapo* の英語読みからとする *The American Language* の説を採りたい)、*Ginee*, *Guinea* [gíni] (アフリカの *Guinea* の黒人の血を引いているとの俗説から) などが用いられた。このほか *Guinea* の変形と考えられる *Ginzo* [gínzou] やアメリカ系イタリア人によって、来たばかりの同国人に対して用いる、*Guido* [gwí:dou] (よくある男子名に由来する) などがある。

最後に、アラブ人に対する差別用語を見る。*A-rab* は *Arab* [árəb] を [éi-rəb] と発音を変えることによる変形による差別用語である。イスラム教の創始者の名であり、それにちなむアラブ人の男子名である *Mohammad*, *Mohammed* がアラブ人の差別用語として用いられるほか、その省略形の *Mo(e)* [mou] も用いられる。メッカ巡礼者を意味するアラビア語に由来する *Hadji*, *Haji* [há:dʒi] や *Terrorist* がイラク戦争や「9.11」以後さらに多用されていると思われる。同じくアラビア語の少女を意味する *Blint* がアラブ人女性の差別用語になっている。その習俗に由来する *Camel rider* / *jockey* やターバン巻きの頭を指す *Towel-* / *Rag-* / *Diaper-head* などがある。

2-2 オックスフォード英語大辞典に見られる *Jap(s)* の用例

特に第2次世界大戦中の *Jap(s)* の多用は、このように敵国出身者への憎悪と人種差別 (racism) にその原因が求められる。日本人に対する差別用語には *Nip* (*Nippon*) や *Tojo* (東条英機) もあるが、ほぼ *Jap* の一語に限られる。この語は本来、*Japanese* (日本人 (の)、日本 (製) の) の省略語であり、中立的な (neutral) 意味で用いられた。*Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (1998) (以下 *OED*²) の *Jap* の項によれば、ほぼ初出例といえる

1890 *Lit. World* 11 July 23 The fearlessness of death, which makes a Jap submit to the loss of his own life rather than to permit the death of a father to go unavenged.

(死を恐れぬ日本人は自らの命を犠牲にしても殺された父の仇をとる。訳・下線は筆者。以下同様)

は、*Jap* (日本人) が *Japanese* の省略語として用いられ、父の復讐のためなら自らの命も犠牲にする異教的心性に対する驚きと否定の気持ちが見られるとは言え、今日的な意味での差別用法ではあるまい。*OED*² の *Jap* の名詞・形容詞の用例には差別用語としての *Jap* は見られない。歴史主義に則りアメリカの用例も入れている、この記述的な辞書に第2次世界大戦中の米国における、差別用語としてのこの語の用例がないのは不思議であ

る。ただ、用法指示についてのコメントで、1928年の第1版にはなかった *the word Jap has strong derogatory connotations and is now falling into disuse.* (*Jap* なる語は軽蔑的含意が強く、現在では使われなくなっている。)が追加されている。この辞書の現在編集中の第3版には差別用語としての用例が追加されることを願う。ついでに述べれば、この辞書にも挙げている *Jap* の動詞用法は面白い。それは比喩的に「奇襲する」の意味で、言うまでもなく語源は真珠湾攻撃であろうが、*OED*² にそのことは書いてない。しかもこの動詞用法の初出年代が1957年と非常に遅いが、もっと初期のものが今後見つかるであろう。*Jap* は将来の第3版での増補改訂を特に期待したい項目の一つである。

3-1 真珠湾攻撃と日系アメリカ人強制収容

1941年12月8日（米国7日）日本海軍機動部隊が、ハワイの真珠湾（Pearl Harbor）にある米国太平洋艦隊基地を奇襲爆撃し、甚大な損害を与え、日米開戦のきっかけとなった。この事件後、在米の日系アメリカ人は敵国日本の出身者として猜疑の目で見られた。当時米国には11万2千人から12万人の日本人移民の一世と二世がおり、そのうちの62パーセントが米国市民権を得ていた。彼らの多くは太平洋岸沿いのカリフォルニア州を中心にオレゴン州やワシントン州に居住していた。危険分子とみなされた日本人は、ルーズベルト（Roosevelt）大統領が1942年2月19日に発した大統領令（executive order）第9066号により、内陸の遠隔地に急造された収容所に3月から強制収容させられた。これに伴い米国政府は、これらの強制収容所を運営管理する機関である The War Relocation Authority（WRA）「戦時移動局」を設置し、この収容所を War Relocation Camps と名づけた。これが正式名称であるが、実態に合わせて ‘concentration camps’ 「強制キャンプ」や、もう少し穏やかな ‘evacuation centers’ 「疎開センター」などとも一般には呼ばれている。この不当とも言える措置に対し、1960年代から始まった日系人による「賠償運動」（Redress Movement）に応える形で、米政府は1988年と92年に正式に謝罪し賠償した。

次に、戦時中に日系人が強制収容された収容所の州名・キャンプ名・開所および閉所年月日・収容人員数の一覧表を、日系人強制収容に関連する各種の充実した資料を掲載しているインターネット・サイト “A Japanese American Internment Curriculum”⁶ によって示すことにする。

Internment Camps for Japanese Americans During World War II

STATE	CAMPS	OPENED CLOSED	DETAINEES
CALIFORNIA	Tule Lake	May 27, 1942 March 20, 1946	18,789
	Manzanar	March 21, 1942 November 21, 1945	10,046
IDAHO	Minidoka	August 10, 1942 October 28, 1945	10,046
WYOMING	Heart Mountain	August 12, 1942 November 10, 1945	10,767
UTAH	Topaz	Sept. 11, 1942 October 31, 1945	8,130
ARIZONA	Poston	May 8, 1942 November 28, 1945	17,814
	Gila River	July 20, 1942 November 10, 1945	13,348
COLORADO	Amache (aka Granada)	August 27, 1942 October 15, 1945	7,318
ARKANSAS	Rohwer	Sept. 18, 1942 November 30, 1945	8,475
	Jerome	Oct. 6, 1942 June 30, 1944	8,497
		DETAINEES	113,230

日系人の強制収容・抑留 (internment) は、彼らの出身国の日本による奇襲攻撃と開戦がきっかけであり、同じ敵国でもドイツ人とイタリア人に対する何らかの拘束は各1万1千人余にとどまり、はるかに少人数・小規模であった。日本人およびアジア人に対する蔑視は、すでに彼らがハワイ・米国移民を開始した1890年代当初から始まっていた。加えて日本は宣戦布告の形を取らないまま、卑劣な先制攻撃をアメリカ領土に仕掛けてきたのは許せないとの反日感情が一気に盛り上がり、*Jap(s)* の使用が米国社会のあらゆる面に広がった。John W. Dower がその著 *War Without Mercy* (1986) で繰り返し述べているように、太平洋戦争は米国にとっては人種戦争 (race war) だったのである。

強制収容所 (Concentration / Internment / Relocation Camps) では、収容された一世も二世も捕虜や囚人扱いであるので、すべての日系アメリカ人が *Jap(s)* と呼ばれた。いろんな場面やメディアでの *Jap(s)* の使用の中でも、最も痛ましく耳を覆いたくなるそれは、ジュネーヴ条約第54条にもかかわらず、強制収容所で何らかの理由で銃殺された日系アメリカ人に米軍の看守・歩哨 (guard, sentry) が用いたものである。目撃者によって各場面の問答が書き残されている *Jap(s)* の使用例には、その場面を生々しい臨場感を持って再現しているインターネット・サイトの資料集 “**American Japanese Internment**” がある。⁷

この資料は筆者の知る限り、第2次世界大戦中の日系人強制収容についての質量ともに充実した資料集である。全体は7つの大項目からなる。第1項目の **Pre-War Intelligence** (戦前の諜報活動) と表題のついたものは、真珠湾攻撃前の1941年10月と11月に行われた日系人の出身国日本と居住国米国に対する忠誠度についての情報収集をおこなった **The Munson Report** という調査報告書である。その内容を大雑把に言えば、現在のところは一世、二世の忠誠心 (loyalty) は疑われないが、事が起こってそれが疑われる場合は、一世の身柄と財産を直ちに連邦政府の管理下に置き、二世に自らと一世を監視させることを結論としている。真珠湾攻撃後この結論が輪をかけて厳しく、強制収容の形を取ったことは日系人に対する猜疑心が極度に高まった結果であらう。

3-2 資料集 “American Japanese Internment” に見る *Jap(s)* の使用例

The Politics (政策・行政措置) と表題がつけられた資料の第2項目は、日系人の強制疎開 (evacuation) をめぐって行政高官が書いた手紙やメモを集めたもので、我々の主題である *Jap(s)* の実例を引くことができる。

例 1は、Roosevelt 大統領によって太平洋沿岸の防衛をゆだねられた John L. DeWitt 中将の1942年2月14日に Henry L. Stimson 陸軍長官に宛てた手紙に、太平洋沿岸には11万2千人余の敵になるかもしれない日系人が放置されていると書いた彼は、後に (1943年春か?)、次のように言い切ったという。

“A Jap’s a Jap, and that’s all there is to it.”

(「ジャップはジャップで、それ以外の何者でもない」、訳・下線は筆者。以下同様)

“A Jap’s a Jap.” という言い方は日系人個人に対す侮蔑だけではなく、日系人全体に対する無条件の蔑視と不信を表す代表的な憎悪表現 (hate speech) となった。この発言に対し1943年4月15日付けの *Washington Post* はアメリカの民主主義と憲法が軍事的熱心党员によって無視され愚弄されていると非難し良識を示している。

例 2は、司法長官の Francis Biddle は1942年の4月17日付けの Roosevelt に宛てた手紙で、

You signed the original Executive Order permitting the exclusions so the Army could handle the Japs. It was never intended to apply to Italians and Germans. Your order was based on “protection against espionage and against sabotage.

(貴殿は、ジャップスを陸軍管轄下に置けるように、彼らの排除を認める大統領令の原文に署名されたのであります。従ってイタリア人とドイツ人には適用を意図したものでありませんでした。貴殿の命令は、

スパイ活動と破壊活動防止に基づいたものでした。)

司法長官の立場からこの大統領令は憲法違反とみなしながらも、時流に妥協し、Roosevelt をかばうことになったと思われる Biddle をして、同じ白人であるイタリア人とドイツ人には差別用語を用いない文脈で、日系人には差別用語を用いている点は注目してよい。

例 3は、1914年12月15日の国会議事録に記載されたミシシッピー州選出の国会議員 John Rankin の発言である。

Once a Jap, always a Jap. You cannot change him. You cannot make a silk purse out of sow's ear. The white man's civilization has come into conflict with Japanese barbarism and one of them must be destroyed.

(ひとたびジャップになれば、常にジャップであります。それを変えることは出来ないのです。豚の耳から絹財布を作ることは出来ないのです。白人の文明が日本人の野蛮と衝突したのですから、どちらか（むしろ後者）が滅ぼされなければなりません。)

Once a Jap, always a Jap. は例1の *A Jap's a Jap.* の発展形である。真珠湾攻撃直後の発言であるせいか、過激を極める。日本人の野蛮な卑しい根性は直らないことを豚の比喻で語り、白人至上主義を唱えたものである。

例 4は、“American Japanese Internment” の第5項目目の ‘Memories’ と題された二人の日系人のこの時期の回想録からである。米陸軍の予備役の少尉だった Minoru Yasui が1941年の12月中旬に現役復帰の命令書を受け取り、部隊駐屯地のオレゴン州 Portland に向かうべく Union Pacific Railroad の駅に切符を買いに行った時、駅員に日系人だという理由で切符を売ってもらえなかった出来事が次のように回想されている。

But the ticket agent wanted to know if I were a “Jap”. When I foolishly answered truthfully that I was of Japanese ancestry, he responded that he could not sell transportation to a “Jap”.

((切符を買いに行ったが) 出札係は君がジャップかどうか知りたいと言った。私が馬鹿正直に自分は日系人だと答えると、彼はジャップには切符は売れないと応答した。)

引用は間接話法で書かれているが、駅員が実際に *Jap* を用いたことは、引用符 (“...”) が付されていることから明らかである。

例 5は、‘Shootings’ と題された第6項目目は収容所で日系人が取るにたならぬ理由で銃殺された痛ましい事件の報告からである。その際に加害者の看守・歩哨が用いた *Jap(s)* の例を見ていく。

Shoichi James Okamoto (30歳) は1944年5月24日に Tule Lake の収容所のゲート近くでトラックを運転中に、歩哨の Bernard Goe 兵卒に銃で撃たれて翌日死亡した。5月25日付けの *San Francisco Examiner* 紙は WRA (War Relocation Authority) 「戦時移動局」の白人の職員の次のような目撃証言を掲載した。

“The guard said, ‘Don’t get out of that truck,’” the witness related. “Anyhow the Jap got out on the driver’s side and I am sure the guard said, ‘Don’t come any closer, you b....’ About that time he drew up his rifle, butt end. He was going to hit him on the head. The Jap moved, the guard backed up about three feet and shot.”

(「歩哨は「そのトラックから出るんじゃない」言いました。いずれにしてもそのジャップは運転席側に出ていました。それで歩哨は「それ以上近づくんじゃない、クソツレ」と確かに言いました。そのとき歩哨は、ライフル銃の銃床を振り上げて彼の頭を打とうとしました。そのジャップは身をおかししました。歩哨は3フィートほど下がり撃ったのです。)」

この事件についての調査員会の報告書には日系人による別の証言もある。トラックの助手席に乗っていた Takanashi を含む8人の日系人による証言である。

The sentry ordered him off the truck and commanded Takanashi to drive. Without a driver's license, the latter explained, he could not drive a truck. The sentry, it is said, was infuriated at this delay. From then on, commands were well peppered with curses... To Takanashi's answer the guard is said to have replied, "You Japs and your WRA friends are trying to run the whole camp."

(その歩哨は Okamoto にトラックから降りるよう命令し、Takanashi に運転するよう要求した。後者は運転免許証がないので運転できないと説明した。歩哨はこの遅滞にいらだったらしい。その後は命令にのしりが多く含まれていた。Takanashi の応答に歩哨は「お前らジャップとお前らの戦時移動局の連中はこの収容所を取り仕切ろうとしていやがる」と返答したと言われている。)

例 6は、家族から引き離され精神を病み自殺未遂も企てた Ichiro Shimoda が、1942年5月13日に Fort Sill 収容所から脱走を試みたとして監視兵に銃殺された事件についての、事件直後の13日付の FBI のメモからである。

One Jap became mildly insane and was placed in the Fort Sill Army Hospital. [He]... attempted to escape on May 13, 1942 at 7:30 a.m. ... he was shot and killed by two shots.

(ジャップ一名が軽い精神異常を来し Fort Sill 陸軍病院に収容された。彼は1942年5月13日午前7時30分に脱走を試み、2発で銃殺された。)

例 7は、Hikoji Takeuchi が Manzanar 収容所で1942年5月16日に Phillips 兵卒に銃撃され重傷を負った事件について、その年の夏に出た WRA の報告書から、監視兵の日系人への対応について述べた部分である。

I asked Lt. Buckner if a guard ordered a Japanese who was out of bounds to halt and the Jap did not do so, would the guard actually shoot him. Lt. Buckner's reply was that he only hoped the guard would bother to ask him to halt. He explained that the guards were finding guard service very monotonous, and that nothing would suit them better than to have a little excitement, such as shooting a Jap.

(私は Buckner 中尉に、立ち入り禁止区域に入った日本人に止まるよう命令して、そのジャップが止まらなかったら、監視兵は実際に彼を銃で撃つのか、と尋ねた。Buckner は、望むらくは監視兵が彼に止まるように面倒でも言ってもらいと答えた。彼の説明によれば、監視兵たちは監視任務に非常に退屈しており、ジャップを銃で撃つような、ちょっとわくわくすることが彼らにはあつらえ向きのなことだった。)

引用文は二世が収容所の外へ出たので銃を発射された事件の報告の前に置かれた文で、文脈はそれほど明らかではないが、恐らく "I" は報告書を書いた WRA の一員で、Buckner 中尉は収容所長か監視長なのであろう。この文は半ば私的な聞き書きになっているので、*Japanese* と *Jap* が一文中に混用されている点が注目される。WRA は収容所の日系人に比較的同情的ではあったらしいが、同時に収容所を管轄する行政機関でもあったので、その二重性格が反映しているのだろうか。

例 8は、*Disillusionment* (幻滅) と題された資料の第7項目にある Joseph Yoshisuke Kurihara の手記からである。彼は戦前までは一世の指導的立場にあって、米国に溶け込むように積極的に働きかけたが、Manzanar に収容された後は反米に転じ、米国政府への抵抗運動の扇動者になった。引用は、1941年12月29日メキシコ湾沖の漁から San Diego 港に戻って来ると、突然、海軍将校に連行されたが釈放され、自分の船に乗った時のエピソードである。

No sooner when I boarded the ship than a plain clothes man yelled, "Hey! you Jap, I want some information. You better tell me everything, or I'll kick you in the ----." My blood boiled. I felt like clubbing his head off.

(私が自分の船に乗るや否や私服刑事が、「おい、てめえジャップ、おれは情報を知りてーんだよ。洗いざらい言わねーと、蹴りこんでやるからな」と叫んだ。私のはらわたが煮えくり返った。彼の頭を殴りつけたかった。)

真珠湾攻撃後、犯人やスパイ扱いされた日系人に私服刑事が高飛車に出ている姿が想像される。

今度は Kurihara が San Diego の港湾長のところへ出航許可を求めて行った時の問答からである。

Seeing that I was a Japanese, he said, "No permit for any Jap." We argued awhile. Losing his temper he said, "Get out or I'll throw you out." So I told him, "Say officer I wore that uniform when you were still unborn. I served in the U.S. Army and fought for Democracy. I may be a Jap in feature but I am an American. Understand!" I saw fire in his eyes, but he had no further words to say.

(私が日本人だと見て取ると、「ジャップには許可を出せない」と彼は言った。私たちはしばらく議論した。彼はかんしゃくを起こして、「出て行かないと、放り出すぞ」と言った。そこで私は彼に、「なあ軍人さんよ、俺だって君が生まれる前にはその軍服を着てたんだぞ。米軍に入って民主主義のために戦ったんだ。俺は顔つきはジャップだが、アメリカ人なんだぞ。分かるだろう。」と言った。彼の目に激怒の火を見たが、彼は二の句が継げなかった。)

戦時中、常に *Jap, Jap* と言われていた日系人が、上記のように自らを *Jap* と呼ぶ場合も珍しくない。その場合、理由は二つあるように思える。一つは諦めと卑下の気持ちからであり、もう一つは相手が使った用語を投げ返す一種の開き直りからであろう。Kurihara の "I may be a Jap" は、俺はお前たちの言う *Jap* かもしれないが・・・と開き直っているのである。

Kurihara の次の *Japs* の用法も開き直りであろう。Manzanar の砂嵐が吹き込む過酷な収容所生活を体験して、米国政府のやり方に抗議するモノローグ的な一節からである。

Why did not the government permit us to remain where we were? Was it because the government was unable to give us the protection? I have my doubt. The government could have easily declared Martial Law to protect us. It was not the question of protection. It was because we were Japs! Yes, Japs!

(政府はなぜ我々が元いたところにいるのを認めなかったのか。政府が我々を保護できなかったからか。疑わしい。政府は我々を保護するために簡単に戒厳令を出せたのに。保護の問題ではなかったのだ。我々がジャップ、そう、ジャップだったからなのだ。)

少なくとも二世は収容所送りにはならないという期待を裏切られた Kurihara は、最後に西部地区防衛司令長官の DeWitt の、筆者も先に引用した悪名高い "A Jap's a Jap. Once a Jap, always a Jap." を引き、そんなアメリカの市民権を拒否し、100パーセント日本人になる決心をして帰国した。

But to General DeWitt, we were all alike. "A Jap's a Jap. Once a Jap, always a Jap." ... I swore to become a Jap 100 percent and never to do another day's work to help this country fight this war.

(しかし DeWitt 大將にとって我々はみな同一なのだ。「ジャップはジャップ。ひとたびジャップになれば、常にジャップ」なのだ。私は100パーセントジャップになり、もう一日たりともこの国がこの戦争をするのに手を貸さないことを誓った。)

3-3 真珠湾攻撃直後の新聞に見られる *Jap(s)* の用例

筆者はこの種の新聞を探していたが、なかなか手に入れることができなかった。幸いにも今回うってつけの資料を見つけた。それは、Eric C. Caren, collected, *Pearl Harbor Extra: A Newspaper Account of the United States' Entry into World War II* (Castle Books, 2001) で、以下の引用はすべてこの本からである（頁数は本書の頁数を表す）。

日本軍の真珠湾攻撃直前に、米国政府内にあわただしい動きがあったことを窺わせる新聞記事が見られる。1941年12月1日付けの *San Francisco Chronicle* の号外 (p. 6) では、東南アジア情勢に対するHull国務長官の和平提案を巡る日米交渉の最中に、日本はインドシナ派兵を増強し、危機を感じた Hull 長官と Halifax 英国駐米大使が急遽会談し、情報交換を行った旨が報じられた。同じ問題で、12月3日付けの *The Dallas Morning News* (p. 7) は、Roosevelt 大統領が野村吉三郎駐米大使にインドシナ派兵の増強が交渉の躓きになると説明を求めた旨を伝えた。日本の回答がある予定の12月5日付の *St. Paul Pioneer Press*, 通常版 (p. 10) は、“JAPS ANSWER TODAY: BREAK NEAR” (「本日ジャップス回答、決裂間近」 訳・下線は筆者。以下同様) と Hull 提案が拒否され、交渉決裂間近かと予想した。7日付けの *Baltimore American*, 通常版 (P. 12) は、“ROOSEVELT SENDS PERSONAL / MESSAGE TO JAP EMPEROR” (「ルーズベルト、ジャップの天皇に私信を送る」) との大見出しで、戦争の危機にあることを伝える警告文を当日送ると報じた。いわば、その回答が真珠湾攻撃であったと言える。

真珠湾攻撃直後のアメリカの新聞各紙はまず号外 (Extra) を多数発行した。ワシントンの *Times Herald* は12月8日の号外 (p. 27) で、“Japs Bomb Honolulu / And Manila, Says F. D.” (「ジャップス、ホノルルとマニラを攻撃、と連邦政府発表」) と大見出しで報じた。この記事から分かるように7日にマニラにも日本軍による攻撃が加えられたのである。この一面の小見出しに“Singapore Set for Jap War Threat” (「シンガポール、ジャップの戦争脅威に対し配置」) と書かれ、マニラ政府が危険地帯からの疎開を国民に命じたことを報じた。同紙の同日発行の通常版 (p. 28) では大見出しの“Japanese Open War on U. S. Fleets in Battle Off Honolulu” (「日本軍米国艦隊をホノルル沖で攻撃、開戦す」) には *Japs* は使用されていないが、同じ一面の小記事の見出しには、“Jap War Stops Welders' Strike” (「ジャップ戦により溶接工組合のスト中止」)、“British Battle Japs in Malaya” (「英軍マレーの日本軍に反撃す」)、“Jap Reply ‘A Lie’ Hull Tells Envoys” (「ハル (国務長官) ジャップの回答は「大うそ」と和平使節団に言明」) と *jap(s)* がちりばめられている。

ここで、8日付け号外で *Jap(s)* を用いた大見出しを列挙してみる。

- ・ JAP AIR TROOPS / IN PHILIPPINES (「ジャップ空軍部隊フィリッピンに上陸」) (*The Philadelphia Enquirer, Extra* (p. 37))
- ・ JAPS BOMB / U.S. ISLANDS (「ジャップス米国諸島を爆撃」) (*THE BALTYIMORE NEWS-POST, Extra* (p. 43))
- ・ “WAR / U. S. Loss Heavy / In Jap ‘Blitz’ on / Hawaiian Islands” (「開戦、ジャップのハワイ島への「電撃」で米国大損害こうむる」) (*Pittsburgh Sun-Telegraph, Extra* (p. 50))

しかし、高級紙として名高い *The New York Times* の City Edition (p. 22) は“JAPAN WARS ON U.S. AND BRITAIN: / MAKES SUDDEN ATTACK ON HAWAII...” (日本米英に開戦、ハワイを奇襲)) との大見出しと、*New York Herald Tribune* (p. 46) は“Japan Declares War on U.S. and Britain, / Hawaii Bombed...” (「日本米英に宣戦布告、ハワイ爆撃」) との大見出しおよび一面関連記事では *Jap(s)* は使われていない。

次は9日付の *The Times Union* の一面トップの大見出し (p. 57) “JAPS TRY TO BOMB COAST; / ROUTED OFF GOLDEN GATE” (「ジャップス沿岸爆撃をもくろむも、金門橋から飛び去る」) は、戦々恐々としている戦時の状況を報じており、関心を引く。8日に敵機と思われるものがサンフランシスコ湾上空に来襲したが、サーチライトに照らされ、また何らかの米軍の措置により引き上げた、という未確認情報である。同じ日付の *Brooklyn Eagle* の一面トップの大見出し (p. 55) “N.Y.-Bound Enemy Planes Alarm Entire Northeast” (「ニューヨークに向かう敵機発見北東部全域に空襲警報」) も未確認情報によるものらしい。この一面に *The Times Union* が報じたものと同じニュースが“Navy Hunting Jap Aircraft off California” (「海軍ジャップ機をカリフォルニア

ア海上で追跡」)の見出しで小記事として出ている。

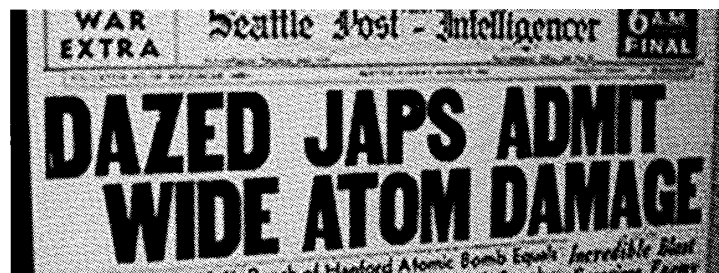
12月7日の真珠湾攻撃の3日後の10日にルソン島で米軍が挙げた戦果を報じて、*The Honolulu Advertiser* は“U.S. BOMBERS BLAST THREE / JAP TRANSPORTS IN PHILIPPINES” (「米爆撃機フィリピンでジャップ輸送船3隻爆破」)との大見出し (p. 59) で報じている。同じ一面の“Jap Strategy Believed To Scatter U.S. Forces” (「米軍分散がジャップの戦術確か」) は、日本は米国の陸軍と海軍を太平洋の広い地域に分散させる戦術を取っていると思われる」と報じた記事の見出しである。12日付の *New York World-Telegram* は“JAP FLEET ON RUN” (「ジャップ艦隊退却」) との大見出し (p. 63) で、米国艦隊による戦果を報じている。

3-4 ヒロシマ原爆投下直後の新聞見出しに見られる Jap(s) の用例

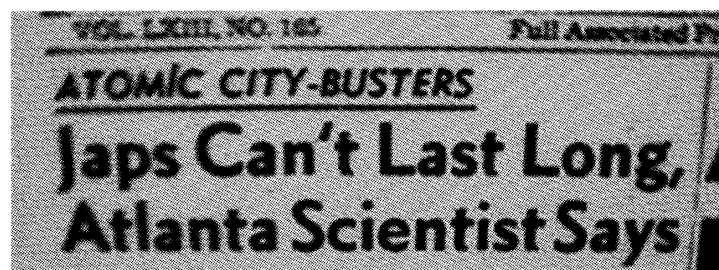
ワシントンDC のスミソニアン航空宇宙博物館で2003年12月15日に開かれた『エノラ・ゲイ展』(Enola Gay Exhibition) に展示された、広島原爆投下を伝える翌日発行の米国諸新聞の *Japs*, *Nip* をふくむ見出しを撮影した写真を見る。これらは Google 検索による「ピンキイ君」のホームページ「日本の歩き方」のヒロシマを見出し語訳とともに転載させていただいたものである。⁸



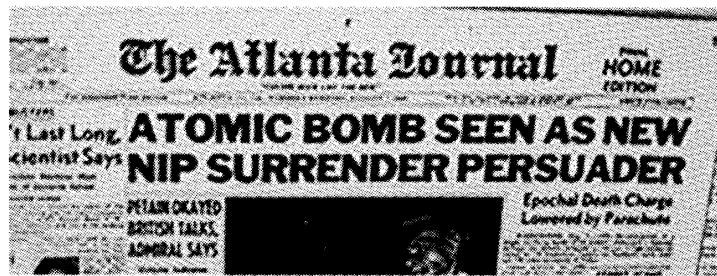
広島への原爆投下を報じる各新聞の掲示板



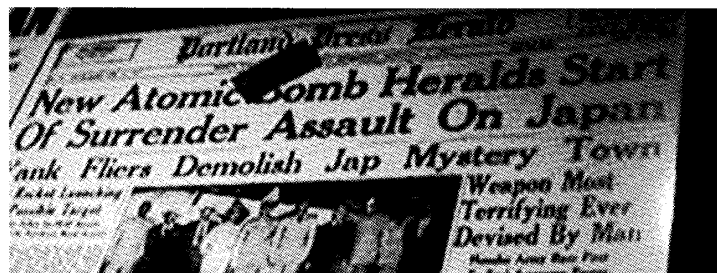
1. 「呆然自失のジャップども、原爆の広範な被害を認める」



2. 「ジャップどもはもう長くない・アトランタの科学者談」



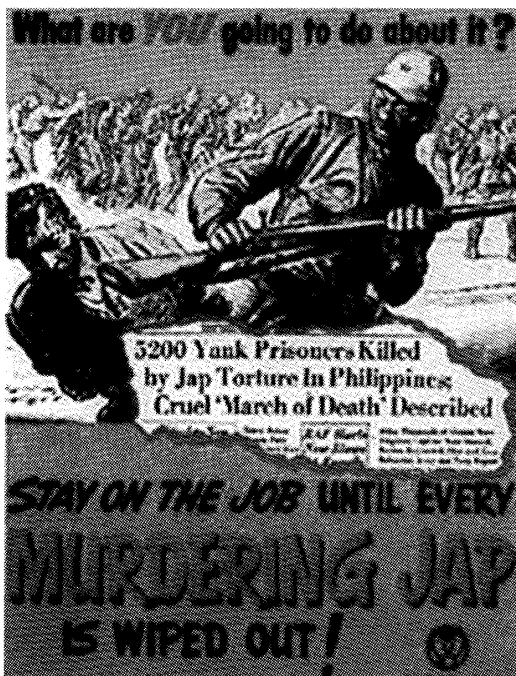
3. 「原爆はニップへの新たな降伏勧告」



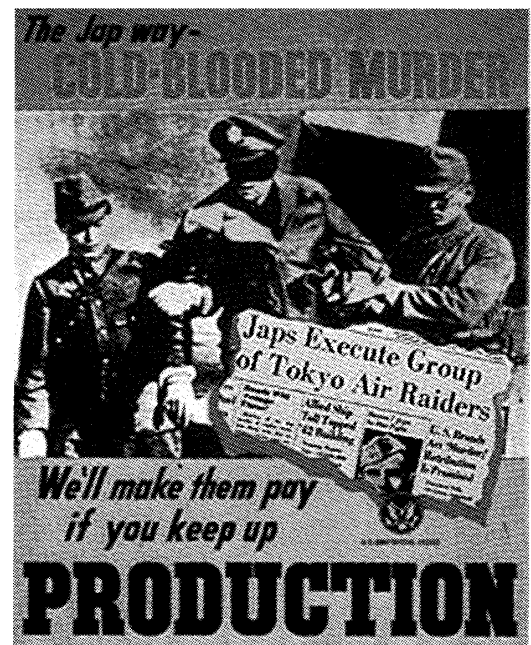
4. 「米空軍、ジャップの秘密都市を粉碎」

3-5 戦時中の軍事ポスターに見られる Jap(s) の用例

第2次世界大戦中米国では、敵国日本・ドイツ・イタリアへの敵愾心を煽り、国威発揚のためにポスターが発行された。ここでは“Japanese American Internment Curriculum”の Posters from World War II⁹ から数点を紹介したい。キャプションの訳は筆者のものである。



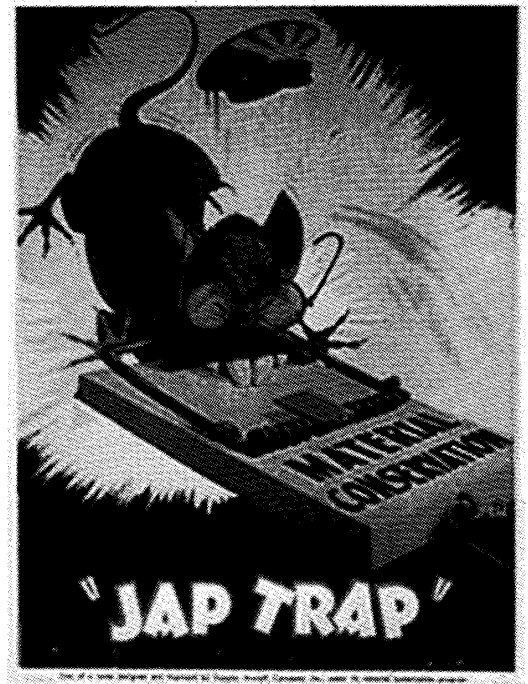
1. Stay on the Job Until Every Murdering JAP (人殺しジャップを全員一掃するまで任務を続けよう！)



2. The Jap Way ... Cold-Blooded Murder!
(ジャップのやり口ー冷血な人殺し！)



3. Attack on a Caucasian Woman. (白人女性を襲う (日本兵))



4. Jap trap (ジャップ (ねずみ) 捕り)
(筆者注：日本人は視覚的にはねずみに見立てられた。)

ポスター 1は、米軍捕虜が日本軍に虐待されている絵に “3200 Yank Prisoners Killed by Jap Torture In Philippines: Cruel ‘March of Death’ Described” (フィリピンで3200人の米軍捕虜がジャップの拷問で殺される。「死の行軍」かくの如し) という見出しの新聞を挿入して、絵の上に “What are You going to do about it?” (この現実には君たちは座して待つつもりか?) と反語的問いかけ文をつけて扇動する。“Stay on the job” (仕事を続けよ) は戦時中よく用いられた「銃後の守り」を奨励する文句のひとつであろう。主見出しの “Murdering Jap” 「殺人者ジャップ」は憎悪がみなぎった、どぎつい言葉である。

ポスター 2は、捕虜になった東京空爆隊の飛行士を日本軍が処刑している写真に、ポスター1と同じように “Japs Execute Group of Tokyo Air Raiders” (東京空爆隊をジャップ処刑) との新聞見出しを挿入し、この写真の上に “The Japs Way—” の標語を掲げ、写真の下に “We’ll make them pay if you keep up PRODUCTION” (諸君が生産を続ければ、我らは奴らに償わせることになる。) とこれも銃後の守りの大切さを訴えたものである。

ポスター 3は、文字の Japs はないが、海軍の日章をつけ、ゴリラと化した日本兵が白人女性に短剣をかざして掴みかかろうとしている図柄に、白人が黒色人種や黄色人種のような異人種に感ずる恐怖感と敵意を、敵国兵士に自国の女性が陵辱されるシーンを描いて煽る常套手段が見て取れ、滑稽に思えるものである。

ポスター 4は、飢えた日本兵ネズミがネズミ捕りにかかった図柄である。板には MATERIAL CONSUMPTION (物資消尽) と日本軍が食い詰めたと表現されている。

3-6 戦時中の軍歌（War Songs）に見られる Jap(s) の用例

反日軍歌の多くが真珠湾攻撃直後に、作詞・作曲・吹き込み・レコード発売された。



1. Remember Pearl Harbor - March (1941)



2. Remember Pearl Harbor (1942)



3. "We're Gonna Have to Slap the Dirty Little Jap" (1941)



4 "You're a Sap, Mr. Jap" (1941)

レコード 1, 2. "Remember Pearl Harbor"

日本軍による真珠湾攻撃直後に反日感情が一気に噴出した結果は、レコーディングされた軍歌にも見られる。「真珠湾を忘れるな」はすぐさま合いことば（Slogan）となったと思われる。その標語を歌の題名に用いた“Remember Pearl Harbor”という同じ題名の歌が2曲登場する。内容はかなり違い、1曲目は、自由のために戦死した祖先を忘れずに我々も勝利に向かって突き進もう、と鼓舞する歌詞で、日本軍もただ‘the foe’と述べられているに過ぎない。この、Don Reid によって作詞され、バンドリーダーの Sammy Kaye によって Day of Infamy「屈辱の日」（真珠湾攻撃を受けた1941年12月7日の翌日、Roosevelt 大統領による対日宣戦布告文に用いられた言葉）の10日後にレコーディングされた曲は、“March with spirit”（元気の良い行進曲）といわれ、全国のラジオ局から放送され、翌年1月にはたちまちヒットチャート3位に上った。この曲のレコードは、インターネット・サイト University of Missouri-Kansas City Libraries の Pearl Harbor - Popular Songs¹⁰で聴ける。

同名のもう1曲の方は Frank Luther によって作詩され、Carson Robinson によって演奏され1942年3月27日にレコーディングされた。こちらの歌詞は、日本人を明確に敵と定め、この裏切り者の敵には「目には目を」の復讐を誓い、

Remember Pearl Harbor

Wipe the Jap

From the map

Give'em hell!

（パールハーバーを忘れるな。ジャップを地上から抹殺し、地獄に落とそう。訳は筆者。以下同様）

と Jap は1回しか用いられないが強烈である。引用の歌詞には、イディオムが二つ使われ *wipe somebody (off)*

from the map (消滅させる)、Give'em hell! (目にもの見せてやれ!) が用いられているが、そうした比喩的な意味よりも、筆者訳のように文字通りの意味に取るほうがよく、Jap と map の押韻が効いていると思う。この曲のレコードは、インターネット・サイト資料 The Authentic History Center の Let's "Slap Some Japs": The Music of WW2 の1曲目で聴ける。¹¹

レコード 3. "We're Gonna Have to Slap the Dirty Little Jap"

3番目に紹介する Bob Miller 作詞、Carson Robinson 演奏の曲は、戦争の狂気をむき出しにした悪名高い人種差別の曲である。曲名からして、"We're Gonna Have to Slap the Dirty Little Jap" (おれたちゃ卑劣なジャップの小男を打ちのめさずにやられない) と、侮蔑と憎悪と復讐の入り混じった感情をもろに表現したものである。この曲も真珠湾攻撃を受けた直後にレコーディングされた。歌詞は1番から4番までであるが、それぞれ

We're gonna have to slap the dirty little Jap
 And Uncle Sam's the guy who can do it
 (おれたちゃ卑劣なジャップの小男を打ちのめさずにやられない
 アンクル・サムはそれができる男だい)

が発句になり、We gotta slap the dirty little Jap (おれたちゃ卑劣なジャップの小男を打ちのめさずに置くものか) が結句になる。この Uncle Sam はアメリカ人の自称である。多分この歌から the dirty little Jap が戦時中の日本人に対する代名詞と化し、We can do it が負けてなるものかというアメリカの国威発揚の標語となり、広く行き渡ったのであろう。この曲のレコードは1と同じ University of Missouri-Kansas City Libraries のインターネット・サイト Pearl Harbor — Popular Songs¹² で聴ける。

レコード 4. "You're a Sap, Mr. Jap"

4番目に紹介する歌は、Cavanaugh, Redmond, Simon の3人合作詩、Carl Hoff 演奏の "You're a Sap, Mr. Jap" (ジャップさん、お馬鹿さんね) という曲で、この曲も対日宣戦布告の3時間前に書かれたと言われている。歌詞は3番まで出だしの2行は同じで、

You're a sap, Mr. Jap, you make a Yankee cranky
 You're a sap, Mr. Jap, Uncle Sam is gonna spanky
 (ジャップさん、お馬鹿さんね、ヤンキーをよろめかせたって
 ジャップさん、お馬鹿さんね、アンクル・サムがあんたのお尻をぶってあげるわよ)

と身の程知らずの日本人を揶揄した歌詞で始まる。この歌詞では sap と Jap, cranky と spanky (= spank you) が押韻し揶揄した調子を高めている。4番まである歌詞は、それぞれ "You're a sap, sap, sap, Mr. Jap" で終わる前の行に、最初に紹介した曲のように、"For we/he'll wipe the Axis right off the map" (おれたちゃ (あんたたち) 枢軸国をこの世から消滅させてやるからさ) と厳しい表現も忘れない。この曲のレコードも、インターネット・サイト University of Missouri - Kansas City Libraries のコレクション Pacific Theater¹³ で聴ける。

実は、1942年に同名の Popeye の短編映画が反日プロパガンダとして制作されたが、この曲を映画の中で Popeye が歌っており、歌と映画の相乗効果を狙ったものである。米国で戦後、戦時中に作られた人種差別色の強い映画は political correctness の立場から、上映や VIDEO, DVD での発売が禁止されたため見る機会が少ないが、この映画は、The Authentic History Center の World War II, 'WW II in Toon'¹⁶ でその断片が見られる。しかし Popeye の反日、反ナチの映画とともに本編を収めた DVD が 'for the study of American history' と目的を限ってドナーション (\$ 16) により入手できる。映画の方は、水夫のポパイが船で海をパトロール中に、日本軍の漁船に擬装した船に出くわし、日本軍は彼と和平条約を交わし署名する振りをするが、後ろから彼を殺

そうとする。しかし彼はハウレンソウをかじり孤軍奮闘して日本軍に勝つという、真珠湾攻撃にかけたストーリーの10分ほどのアニメである。

3-7 戦時中のプロパガンダ映画 *The Battle of China* (1944) のナレーターの用いた *Jap(s)*

米国が第2次世界大戦に参戦した直後に、陸軍参謀総長の George C. Marshall は兵士たちに、今度の戦争に対する心構えを説くべく、ドキュメンタリーのプロパガンダ映画の制作を思いつき、当時すでに *It Happened One Night* (1934), *Mr. Smith Goes to Washington* (1939), *Meet John Doe* (1941) など名を成していたハリウッ드의映画監督 Frank Capra に白羽の矢を立てた。始め躊躇した Capra も説得され、*Prelude to War* (1942) を第1作に1945年までに全部で7作の映画を制作した。これらは後にまとめて *Why We Fight* シリーズと名づけられた。彼は敵国のドイツ・イタリア・日本の枢軸国から奪い取ったニュース映画と味方のイギリス・フランス・ロシア・中国などの同盟国のニュース映画や宣教師が撮影したフィルムを巧みにモンタージュし、地図・標語・音楽・ナレーションを加えて、この戦争が、野蛮凶悪な世界制覇を標榜する狂信的な帝国主義国家に対する文明と民主主義と正義と平和を護る戦いであることを明確に出張し、この戦争を戦わなければならない理由を明らかにした。この陸軍省が制作したプロパガンダ映画シリーズは、米国内で高い評価を得て戦時中、何百万人もの米軍兵士に見せられたのみならず、フランス語・スペイン語・ロシア語・中国語に吹き替えられて海外にも配給されたということである (John W. Dower, pp. 15-16参照)。

我々が特に注目すべきは、シリーズ6作目の *The Battle of China* (1944) である。中国が4千年におよぶ歴史を持つ悠久の国家であり、これまで一度も他国を侵略したこともない文明国家と賛美される。この広大で人口が多く資源に富む中国が、資源のない野蛮な小国家の日本に狙われ、日中戦争によって、不当にも上海を攻撃占領され、満州を侵略され、南京虐殺の惨事を受け、すべての港の制海権も奪われた。それにもかかわらず、中国はよく苦難に耐え、団結して国家再建にいそしみ、中国軍に食料と物資を輸送するためのビルマ・ルート (Burma Road) を連合軍と協力して造る偉業を成し遂げた。この映画の主張は、中国は米国の同盟国であり、真珠湾攻撃はこのような日中戦争の延長線上にある日本の帝国主義によるものだということである。以上の内容を持つこの映画は、1927年に当時の田中義一首相が天皇に世界制覇の筋書きを上奏した文書とされ、今では偽書とみなされている「田中上奏文」(Tanaka Memorial) を日本の侵略意図を裏付ける文書として何度も画面に出すなど問題はある。この映画のナレーターに起用された Anthony Veiller は、特に映画の後半、日本軍の攻撃の場面にかぶせるように、

“the invading Jap army”, “Jap conquest of ...”, “Jap forces”, “Jap war machines”, “Japs surrounded the city”, “Japs attacked Shanghai.”, “Japs secretly broke all the agreements.”, “Japs landed the port.”, “Japs violated Nanking and killed 43,000 people.”, “Japs’ lifeline”, “to strike at Japs”, etc.

と立て続けに日本人と日本軍を *Jap(s)* と呼んで、はばかりところがない。こうしたことは、戦時中のプロパガンダ映画である以上、我々も戦時中は鬼畜米英と呼んでいたことを思えば当然とも言えないこともない。筆者の見たこの映画は、World War II と名づけられたシリーズの第3巻に、*Why We Fight* シリーズの第5作のナチス・ドイツのロシア侵攻を扱った *The Battle of Russia* (1943) と併せて収められている DVD¹⁴ による。

3-8 John W. Dower, *War Without Mercy* に見られる *Jap(s)* の引用例

John Dower の *War without Mercy* は、米国の敵国日本に対する憎悪表現として多くの文書やメディアに現れた *Jap(s)* の引用例を多数収めている。それぞれの引用には出典が巻末の註で示され信頼できるものである。その中から若干の用例を借りることにする。

ハリウッ드의映画監督 Frank Capra は、陸軍参謀総長の George Marshall の要請でプロパガンダ映画 *Why We Fight* シリーズを作ったことは前述したが、その計画段階のメモで、“Let our boys hear the Nazis and the Japs shout their own claims of master-race crud.” (p. 16) (ナチスとジャップが支配民族であると豪語するのを、兵士

たちに聞かせてやれ。訳は猿谷要監修・斉藤元一訳『容赦なき戦争』（平凡社ライブラリー）による。以下同様）と述べて、この戦争の理由を兵士たちに知らせることを映画製作の目的とした。

真珠湾攻撃を受けた後、海軍大将 William Halsey は、憎しみに燃え “Kill Japs, kill Japs, kill more Japs” (p. 36) (訳省略) のスローガンを掲げて部下の士気を高めた。後に南太平洋米軍総司令官になった彼は過激な表現を得意とし、1944年初めの記者会見で、当時世間で言われていた “The only good Jap is a dead Jap” (唯一の良きジャップは死んだジャップ) を “The only good Jap is a Jap who’s been dead six months” (p. 79) (唯一の良きジャップは6ヶ月前に死んだジャップ) と即席にもじって述べたという。

1943年3月号の *Time* 誌は

“Low-flying fighters turned lifeboats towed by motor barges, and packed with Jap survivors into bloody sieves. Loosed on the Japs was the same ferocity which they had often displayed. This time few, if any, Japs in battle green reached shore.” (p. 67)

(低空飛行の戦闘機が [モーターボートに曳かれた、(筆者補足)] 生き残りのジャップでいっぱいの救命ボートを血の海 [水漏れ船 (筆者註)] に変えた。ジャップに浴びせられたこの残忍さは、かつて彼らがしばしば示したものである。今回の攻撃の結果、岸にたどり着くことができた [軍服を着た (筆者補足)] ジャップはほとんどゼロに近かった。)

と、報道している。

1927年に *Spirit of St. Louis* 号で初めて大西洋単独無着陸横断飛行に成功した Charles Lindbergh は、太平洋戦争中、軍事顧問として海兵部隊の任務につき、その見聞を日記に書き残した。彼は1944年7月13日に日記で、

“It was freely admitted that some of our soldiers tortured Jap prisoners and were as cruel and barbaric at times as the Japs themselves. Our men think nothing of shooting a Japanese prisoner or a soldier attempting surrender. They treat the Japs with less respect than they would give to animal, and these acts are condoned by almost everyone.” (p. 70)

(味方の兵士たちに中にも、[ジャップの捕虜を虐待し (筆者補足)] ジャップと同じくらい残酷で野蛮な者がいたということは、広く認められていた。われわれの兵士たちは、日本人捕虜や降伏しようとする兵士を射殺することをなんとも思わない。彼らはジャップに対して、動物以下の関心しか示さない。こうした行為が大目に見られているのだ。)

と、やはり先の *Time* 誌と同じく米軍の「目には目を」の報復行為を堂々と記している。

やや通俗的ではあるが科学雑誌の *Science Digest* は、1945年3月号に “Why Americans Hate Japs More than Nazis” という見出しの記事を載せた。戦時中の憎悪語である *Japs* と *Nazis* が、科学雑誌の題名にも用いられたのは少し驚きである。もっともこの記事は話題設定からして非科学的な感情的なもので、同じ敵でも白人のドイツ人と違って、日本人の肉体的な違いに対する違和感 (cf. “yellow monkeys”) に、憎悪の理由を求めたものらしい。*New York Times* の新聞記者 Tolischus も、敵国人をあらわす憎悪語を二つ並べた言い方に従い、自著 *Tokyo Record* (1943) の第28章を “Nips and Nazis” (p. 78) と名づけたという (p. 78)。

4 人種差別用語撤廃の困難な状況（あとがきに代えて）

かつて存在し、今も存在する特定の差別語を存在しなかったもの、存在しないものとするのは出来ない。それは歴史に刻まれており、現在も使用され続けられているからである。被差別者が差別者によって投げつけられた差別語から差別的意味や、ましてや憎悪の感情を抜き去ることは出来ない。被差別者は社会のマイノリティであり、弱者（羨望の的になる強者に逆転する場合もまれにありうるが）であり、よそ者・敵対者であるとみなされるがゆえに差別されるのである。差別語をなくさないまでも減少させる方法には、法的・文化的にその語の使用禁止にシタブー語にすることも考えられるが、人の心を規制しようとするのは無理な相談で非現

実的な話である。前に見た「性差別用語」では、feminism や politically correct の普及による言い換え語の提案によってかなりの部分が解決を見た。「性差別用語」の場合は、-man のつく職業語のように、その職業に女性も就いていることを承知で、またその逆に従来女性接尾辞の -ess をとる職業が女性に固有なものといえないことを承知で、差別の意識なく社会的慣用として、公式文書にさえ使用されてきたものが多かったので、新たな言い換え表現に成功したと思われる。

しかし「人種差別用語」では話しは遥かに深刻である。確かに「黒人」の場合は、nigger, negro, colored などの侮蔑語や不快語を言い換え語の African American に、Jap を Japanese American に言い換えることは形式的には可能だが、言い換え語では差別・侮蔑・憎悪の感情表現にはならない。人間は一般に理性よりも感情の生き物である。「人種差別用語」は特にその意図的な使用が特徴であるため、その多くが造語法的には、効果を求めて正式名称を意図的に省略または改変したものが多い。従って根深い蔑視と憎悪の感情がこめられた「人種差別用語」には代替表現は求めにくく、そうした感情がなくならない限りそうした用語を廃用にできない。この点が、多くの「性差別用語」（職業名）と著しく異なる点である。では「人種差別用語」を減少させ、なくす方法はないのか。結局、差別が過去の怨恨に由来するものであれば、過去の歴史認識を長いスパンから見直し、もし誤解や短絡的思考に基づくものであれば、啓蒙と教育によって知らしめ、被差別者が差別者と同等の人権と平等と人間の尊厳を有していることを認識させ、相手の立場に立ち他者の痛みが分かる人間教育を忍耐強く施すしかないだろう。筆者のように、日本人が自らに対する侮蔑語の Jap(s) を研究することに、自虐的であるとの意見が、単純すぎる愛国者や保守派の人々から出ると思われるが、歴史的事実を明らかにすることは現代に生きる者の務めである。アメリカにおける Jap(s) を含む資料の保存は、日系人の場合は当然としても、その他のものも多いことに感心させられる。自らの汚点の一部とも考えられる人種差別に関するさまざまな資料が、実際の博物館やウェブサイトの歴史資料館やいくつかの大学のコレクションに保存されているのを見ると、アメリカの懐の深さを感じられる。最後に、原稿を読んでコメントをくださった笹川壽昭氏、成田圭市氏、レコード音声から“Remember Pearl Harbor”の歌詞を書き取る仕事を助けてくださった Gregory Dunn 氏、それに本論の一部を卒論で扱った元ゼミ生の鏡幸恵君に感謝の意を表します。

5 註

1. http://en.wikipedia.org/wiki/List_of_ethnic_slurs 同じ内容のものが次のサイトでも見られる。
<http://www.answers.com>
2. http://en.wikipedia.org/wiki/Offensive_terms_per_nationality
3. *The American Heritage Book of English Usage: A Practical and Authoritative Guide to Contemporary English* (Houghton Mifflin, 1996), pp. 190-1, s.v. black
4. *ibid.* s.v. Jew
5. *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. (OUP, 1989), s.v. Hun, n. 4a
6. <http://bss.sfsu.edu/internment/concentrationcamps.html>
7. <http://www.geocities.com/Athens/8420/main.html>
8. <http://bhn.jpn.org/nippon/hiroshima.html>
9. <http://bss.sfsu.edu/internment/posters.html> 反日ポスターは次のサイトでも見られる。
<http://www.snapshotsofthepast.com/war-posters-anti-japanese.html>
10. <http://www.umkc.edu/lib/spec-col/ww2/PearlHarbor/popular-songs.html>
11. <http://www.authentichistory.com/audio/ww2/ww2music01.html>
12. <http://www.umkc.edu/lib/spec-col/ww2/PearlHarbor/popular-songs.html>
13. <http://www.umkc.edu/lib/spec-col/ww2/PacificTheater/jive.htm#jive>
14. *World War II, Vol. 3 : Battle of Russia / The Battle of China* (1943), Madacy Entertainment, 1998. DVD-9-9000-3.

6 参考文献（アルファベット順）

- Allen, Irving Lewis, *Unkind Words: ethnic labeling from Redskin to Wasp*. Greenwood, 1990, 翻訳。アービング・ルイス・アレン著、岩崎裕保監訳『アメリカの蔑視語』明石書店、1994年。
- The American Heritage Book of English Usage: A Practical and Authoritative Guide to Contemporary English*. Houghton Mifflin, 1996.
- ベフ、ハルミ編『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院、2002年。
- Caren, Eric C., *Pearl Harbor Extra: A Newspaper Account of the United States' Entry into World War II*. Castle Books, 2001.
- Dower, John W., *War Without Mercy: Race & Power in the Pacific War*. Pantheon Books, 1986. 猿谷要監修、斉藤元一訳『容赦なき戦争』平凡社ライブラリー419. 2001年。（元版は1987年。）
- Ford, Henry, *Jewish Activities in the United States. Vol. II of The International Jew*. Repr. Liberty Bell Publications, 2004. Original ed., 1920.
- The Japanese American Curriculum Project, ed. *Japanese American Journey*. 1985. 北星堂書店教科書版、1989年。
- Kawamura, Yoshiharu and Muraskin, Robert, *Ethnic Minorities in the U.S.A.* 成美堂、2004年。教科書版。
- 菊池久一著『憎悪表現とは何かー＜差別表現＞の根本問題を考える』勁草書房、2001年。
- 今野敏彦著『蔑視語 ことばと差別』明石書店、1988年。
- Matsuda, J. Mari, et. al. *Words that Wound: Critical Race Theory, Assaultive Speech, and the First Amendment*. Westview Press, 1993.
- Menken, H. L., *The American language: an inquiry into the development of English in the United States*. the fourth edition and the two supplements, abridged, with annotations and new material, by Raven I. McDavid, Jr., with the assistance of David W. Maurer. Knopf, 1963. 特に、9: Terms of Abuse.
- 水野剛也著『日系アメリカ人とジャーナリズム』春風社、2005年。
- オカノ、ケネス・T., 片山久志共著『あるハワイ移民の遺言ーハワイ・ヒロシマ・ナガサキを結ぶ移民1世と3世の物語』川辺書林、2005年。
- The Oxford English Dictionary*, 2nd ed. OUP, 1989.
- Roback, Abraham, *A Dictionary of International Slurs*. Repr. Maledicta Press, 1979. Original ed., SCI-SRT Publishers, 1944.
- シュウォーツ、マリリン著、前田尚作訳『バイアスフリーの英語表現のガイド』大修館書店、2003年。
Marilyn Schwartz, *Guidelines for Bias-Free Writing* (Indiana U. P., 1995) の翻訳。
- 田中克彦著『差別語からはいえる言語学入門』明石書店、2001年。
- 「トリッパー」1977年秋季号（週刊朝日別冊）、特集「いま、なにが差別表現なのか」朝日新聞社、1997年。
- Tsukamoto, Mary and Pinkerton, Elizabeth, *We the People: A Story of Internment in America*. Laguna, 1986. 英宝社教科書版、1993年。
- 内野正幸著『差別的表現』有斐閣、1990年。
- Walker, Samuel, *Hate Speech: The History of American Controversy*. Univ. of Nebraska Press, 1994.
- Whillock, Rita Kirk and Slayden David, eds. *Hate Speech*. Sage Publications, 1995.
- 山本英政著『ハワイの日本人移民ー人種差別事件が語る、もう一つの移民像』明石書店、2005年。